

# 場所に縛られる女性たち

ヴァージニア・ウルフの *To the Lighthouse* におけるラムジー夫人の再解釈

伊瀬知 ひとみ

## はじめに

Virginia Woolf の *To the Lighthouse* (1927) は、1910年代のスコットランドのスカイ島を舞台に、ラムジー家とその訪問客たちが経験した出来事を中心に展開される。先行研究では様々な解釈がされてきたが、女性は家庭内の役割を、男性は家庭外の役割を担う、という二分法的な解釈が主流になっている。しかし、これらの先行研究には2点問題がある。1つ目は、ラムジー夫人が家庭を差配する様子と、男性がコミュニティの中で振舞う様子が似ている点が軽視されていることだ。振舞いの様子には男女の差がなく、その振舞いが行われてきた場所が異なっていることを読者は見落としてきた。2つ目は、作中の女性の領域を単純化しすぎてきたことだ。男女それぞれの行動範囲を家庭の中と外と簡単には二分できず、むしろ、両者を分け隔てる境界線は実際にはどこにあるのかを再考すべきである。そこで本発表では、ラムジー夫人をはじめとした登場人物たちの場所の関係性に注目し、女性の権力と場所や空間による制約を分析することを目指す。

## ラムジー夫人の慈善活動

作品冒頭、ラムジー夫人は「社会問題の調査員になりたい」という願望を抱く。実際に夫人は貧しい人々の住まいを訪ね、衛生指導・観察・情報収集にあたっている。これは単なる慈善活動ではなく、当時の大英帝国を維持させるための国家的戦略の一つだった。後期ヴィクトリア朝からエドワード朝にかけて、イギリスでは家庭生活に根差した国家の立て直しが唱えられ、女性に対しては、次世代のイギリス国民を生み育てるために母性を改善することが最優先で求められた。理想の母親と見なされた中産階級の女性たちは貧しい人々を訪れて生活指導を行い、その中から、国力回復のための社会問題究明を主義主張とした女性社会調査員が誕生した。つまり、夫人は帝国主義イデオロギーを維持する一機能として家庭訪問をしていると言える。しかし、このような夫人の行いも、作中では、美しく優しい女性の慈悲深さの一例としてしか見なされない。

では、なぜ夫人の行為が帝国主義的戦略ではなく、慈善活動として見なされてしまうのだろうか。ここで、ユルゲン・ハーバーマスが提唱した公共圏の理論を援用する。ハーバーマスは『公共性の構造転換』において、18世紀のイギリスで①政治や行政機構が権力を有する「官/国家領域」、②家庭の領域である「親密圏」、③先の2つの領域の間に広がる「公共圏」、の3つの領域が形成されたと論じた。しかし、ナンシー・フレーザーが指摘したように、官/国家領域と公共圏を行き来できたのは特権階級の男性のみだった。女性が存在できる領域は親密圏とされ、彼女たちは政治・経済・教育が論じられる公共圏にアクセスすることはできなかった。ただし、女性たちが家庭外と関わりを持てた場所があった。公共圏と親密圏が重なり合っている領域である(本発表ではこの領域を「準公共圏」と呼ぶ)。準公共圏では、社交、教会活動、慈善活動などが行われ、形式的には「私的」で「女性らしい」活動に見えながら、実質的には社会的影響力を持つ公共的機能を果たしていた。

ラムジー夫人の家庭訪問は、男性が官/国家領域や公共圏で行う活動形式と違いはない。その活動が準公共圏であるというだけで、慈悲深い家庭の天使の私的行為としてみなされている。つまり、女性たちは自身が存在する場所のその場所性により、行為の影響力が過小評価されているのである。

この準公共圏の概念は、ラムジー夫人がイギリス国内のミルクの流通経路について思案する場面でも適用できる。夫人の夢の一つである模範的な酪農場の建設は、当時のイギリスでは人々の関心ごとの一つだった。良質なミルクは丈夫な子どもの体を作るために必要だと考えられ、世界の覇権争いにおいても、ミルクの給食は国家的な事業となっていく。社会問題調査員の精神を持った夫人も当然ミルクに強い関心を抱いており、晩餐会の席で夫人は、ミルクの流通問題について熱意と雄弁さをもって語る。これは公共圏で公共的な議題を討論する様式そのものである。しかし、彼女の熱弁は晩餐会の出席者から笑われてしまう。もし男性が同じ主張を公共圏で行ったならば、社会改革の提案として真剣に議論されるだろうが、晩餐会という準公共圏で女性が語ると、それは笑いの対象となる。彼女が女性であり、活動範囲が準公共圏に納まっているために、意見は真剣に受け止められない。夫人が準公共圏を通して公共圏へ参入しようとする試みは、こうして阻まれる。

## 晩餐会でのラムジー夫人

晩餐会は準公共圏の領域にあり、晩餐会を通して女性は公共圏での男性的権力を疑似体験することが可能に

なる。作中でもラムジー夫人は晩餐会で権力を行使している。従来の研究では、晩餐会での夫人のもてなしは単なるホスピタリティして読まれてきたが、晩餐会を差配するその様子は、男性が官/国家領域や公共圏でコミュニティを取りまとめる図式と同じである。夫人は客を選定し、座席を配置し、会話の流れを緻密に計算し、洗練されたフランス料理でこの家庭の文化的水準を示し、夫に詩を朗読させて教養ある雰囲気を出している。

最も重要なのは、社会的結束を生み出す創造者としての夫人の役割である。場の空気が温まっていないのを感じ取った夫人は、この場を夫に任せずに自分で流れを作って和やかな雰囲気を創造しようとする。これは家事労働ではなく、異なる背景を持つ人々を統合する公共的な行為であり、男性政治家や企業家の公共圏での行為と同質のものである。しかし、決定的な違いはその振舞いが行われる場所だ。夫人の活動は晩餐会という準公共圏で行われるため、「女性のもてなしや気配り」として理解され、過小評価される。場所が準公共圏であるために、彼女の能力は「女性らしい」活動という限定された枠組みの中で不可視化されてしまうのである。

## リリーと「芝生の端」

作品第三部では、ラムジー夫人の死後、リリー・ブリスコーが新しい世代の女性の可能性を示唆する。夫人は度々一人で窓辺に座り、灯台の光を見ては「あの光は私だ」と光に自分を重ね合わせるが、作中では夫人が灯台に行く場面は描写されない。また、ラムジー氏が自由に行動できるのとは対照的に、夫人は屋内にすることが多く、室内から外を見るときには閉め切った窓越しである。窓という透明な障壁は、外の世界を見ることはできても、そこに参加することはできないという女性の空間的制約を象徴している。対して、灯台は人間によって建設された、男性領域の技術を結集させた成果の一つであり、外の世界、自由、公共圏の象徴である。作品終盤で実際に灯台に行くのは、ラムジー氏と息子ジェイムズと娘キャムである。

一方、リリーは異なる位置にいる。作品第三部でリリーは芝生の端にイーゼルを立て、どうやって絵を描こうかと思いを巡らせる。そのとき、灯台に行く一行が芝生の端を通り過ぎていくのを目撃する。リリーは、自分の感情の半分が沖合に引っ張られ、もう半分は芝生の上にへばりついているような感情を抱く。この描写は、ラムジー夫人の死後、次の世代の中から、完全に家の中にいるわけではなく、完全に海に出ているわけでもなく、古い区分の領域から新しい区分の領域へ移行する女性が登場しつつあることを表している。

リリーは芸術家として、絵を描くことで自己表現をしようとするが、創造的行為は男性的公共圏の一例である。作中でもタンズリーは「女性は絵も描けないし、文章も書けない」と主張しており、これは公共圏からの女性の排除を意味する。リリーは夫人のように晩餐会などの準公共圏で活躍したいわけではないが、公共圏への参入も容易ではない。彼女は既存のどの領域にも完全には属さず、自分自身の場所を創造しようとしており、「芝生の端」という位置はそれを表象する。親密圏でも準公共圏でも公共圏でもない、境界そのものに立つことがリリーの選択である。ラムジー氏たちが灯台に到達したのをその目で見届けた直後、彼女も絵を完成させる。リリーは公共圏の象徴である灯台に同行しなかったが、境界上で自身の芸術的目標を達成させた。「芝生の端」に立つリリーは、親密圏と準公共圏と公共圏のいずれか一つのみには縛られない、新しい女性の位置の模索を示している。窓というガラスの障壁に閉じ込められたラムジー夫人から、障壁なしに外を直接見ることができ、「芝生の端」で絵を完成させたリリーへの変化は、女性が場所の制約から解放され始めたことを示す。

## 終わりに

ウルフは本作品において、男性と女性という二元論的領域の中で、女性が家庭に閉じ込められているという単純な図式ではなく、女性の影響力が場所によって可視化されたり不可視化されたりする複雑な構造を描いた。ラムジー夫人の振舞いは親密圏・準公共圏・公共圏を貫くものであるにもかかわらず、女性の社会での活動領域が限定されているがゆえに、夫人の影響力は不可視化されている。一方、リリーは「芝生の端」という新しい境界上の位置を獲得し、自分自身のヴィジョンを完成させた。場所に縛られる女性の影響力と、その制約からの解放の萌芽を、本作品は示しているのである。

## 主要参考文献

Fraser, Nancy. "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy." *Social Text*, no. 25/26, 1990, pp. 56-80. 「第3章 公共圏の再考—現存する民主主義批判のための論考」『中断された正義—ポスト社会主義的 条件をめぐる批判的省察』仲正昌樹監訳、御茶の水書房、2003年、107-50頁。

Woolf, Virginia. *To the Lighthouse*. New edition. Oxford UP, 2006.

ハーバーマス、ユルゲン著、細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究』第2版、未来社、1994年。